

指示の不可測性テーゼとその再検討

次田 瞬

1. はじめに

クワインは『ことばと対象』2章において言語間の翻訳について論じることで、文の翻訳の仕方が決まったとしても、文に現れる名辞の翻訳は不確定であるとするテーゼ、いわゆる指示の不可測性テーゼを提示した。しかし、この驚くべき主張は、行動主義的な言語観を前提としており、また、その論証自体は著しく人工的である。そのため、一見するとこのテーゼは「指示」という言葉の一般的な使用を単に歪めたことの結果ではないかという印象をもたせる。とはいえ、それではクワインは日常的なコミュニケーションが困難になるような仕方で、言明の指示対象の不確定性が生じると考えているのかといえ、全くそんなことはない。彼は言語の同一性規準を「対話の一般的な円滑さ」(OR 87)に求めているほどである。つまり、コミュニケーションの円滑な進行にとって何ら妨げにならないような仕方で指示の不可測性は成り立つというのがポイントになっている。だが、それを理解するにはどのような状況を思い描けばよいのだろうか。

この問いに対して本稿は、通常のコミュニケーションにおいて我々がその発話内容を解釈すべき相手は必ずしも真なる信念を持っているとは限らないという点に注目し、そうした相手が用いる名辞に一意的な解釈を充てられるという保証はない、という観点から一定の見通しを与えたいと考えている。この解釈は決して新しいものではないが、にも関わらず本稿でそれを述べることの眼目は、クワインの行動主義それ自体の当否に関して比較的中立な具体例を提示することで、指示の不可測性テーゼを行動主義に対する帰謬法としてではなく、肯定的な内容を引き出せるものとして捉えらると思われるからである。しかしまずは、クワインが言語に関する自身の行動主義的アプローチをどのように提示しているのかを振り返るところから議論を始めよう。

2. 言語の習得

言語哲学の全体が究極的にはそこに収斂していくような最重要課題は、「言葉

の意味とは何か」という問題であろう。この問いに対して、クワインは論文「経験主義のふたつのドグマ」において、同義性の概念が不明瞭であることを根拠にして、意味という抽象的な措定物を立てることはできないと結論した。意味が存在者でない以上、言葉を理解するとは意味なる対象を把握することであると考えすることはできない。クワインは、そもそも意味に訴えることで翻訳や理解といった言語的実践が実質的に説明されるという事態を根本的に認めない。

人々は意味を知ることや意味の同一性について語り続ける。意味の観念が理解や表現の同値をいくらか説明してくれるように感じられるからそうするのだ。我々が表現を理解するのはその意味を知らないし把握することによってである。ある表現が別の表現の翻訳やパラフレーズとして働くのは、それらが同義だからである。勿論これは誤った説明であり、最悪なことに心主義的説明である。[...] 意味についての語りには説明の錯覚がある。(CCE 247f)

たしかに、意味の観念を持ち出すことで一見説明したことになるような場面はある。ある発話が奇妙であることを、話者は語の意味を誤解しているなどと説明する場合がそれである (Hylton, 101)。意味の概念は日常的な有用性を持つ。だが、言語の翻訳や理解に対する説明としては機能しないとクワインは考える。

とはいえ、仮に言葉の理解が何らかの抽象的对象を把握することから成り立っているのではないとしても、我々が言葉を理解しているときには、心の中に何らかの観念が抱かれているのではないかと考えられるかもしれない。クワインはこうした言語観を「心主義 *mentalism*」とか、「博物館の神話 *the myth of the museum*」(OR 27) などと呼ぶ。この言語観によれば、言葉は意味という展示物に付されたラベルである。翻訳するとは展示物のラベルを換えることであり、意味を理解するとは展示物を心に抱くことであるなどと説明される。しかし、クワインはこのような意味の理論は説明の方向を取り違えているという。意味は説明の連鎖の終わりでは決してない。我々は客観的で経験的テストに対して開かれた言語行動から出発するべきであって、個人の心の中にある私秘的な対象から出発すべきではない。かくして

行動主義的アプローチは義務だと私は考える。心理学において人は行動主義者であったりなかったりしうるが、言語学では選択の余地はない。我々は他者の言語行動を観察し、自身のまごつく言語行動を他者に観察され、強化・

修正されることで母語を習得する。[…] 観察可能な状況における明示的な振舞いから取り出される事柄を超えた言語的意味など存在しない。（CCE 341）

さて、ここまでの議論によって行動主義的アプローチが果たして正当化されたのかといえば、疑問の余地があろう。例えば、そもそも刺激や行動のみに注目することで言語の習得を説明するのは無理があるのではないか、といった批判がチョムスキーなど生得論者によって行われてきた。彼は幼児を、母語の構文論に関して仮説を立てては修正していく小さな言語学者とみなした（構文論の仮説とは、例えば、平叙文の語順を変えて疑問文を作るといった手順に関する仮説である）。そして、通常の子供が学習において発揮する素早さは、仮説を立てる際の一般的原則（単純性や一般性など）などに尽くされない別種の制約が存在することを示していると考えた。それが普遍文法の知識なのである、と。

「刺激の乏しさ」からの（生得説の）論証は当初、経験主義寄りの哲学者からの批判を多く集めた。目下の脈絡で特に興味深いのは（論理的行動主義者とされる）ライルの議論である。彼は、母語の文に対する「観察」といった表現の使われ方に注目して、チョムスキーの議論を次のように纏めている。

チョムスキーとヴェンドラーがともに誤りを犯したのは次の点であると思われる。他の多くの人たちと同じく、彼らはまず、パヴロフやスキナーおよびその系統の人たちが科学的な、したがってまた機械的な学習理論を構築したと、あるいは少なくとも構築しつつあると考えた。パヴロフの実験では、檻に入れられ拘束服を着せられた犬が、実験的条件下で訓練された結果として、ベルが鳴るたびに唾液を流すようになる。同一刺激、同一反応。しかしここでチョムスキーは、人間が言語を習得する場合、ごく短期間で、習ったことのない文を作り出し、聞いたことのない文を理解できるようになるという決定的な事実に着目する。同じ刺激（または無刺激）に無限に多様な反応。我々は機械的に話すわけではない。したがって（議論の運びに注意せよ）、学習することはパヴロフ的に条件付けられることであるから、言語を学習する人は話すことや話を理解することを学習するのではない。（Ryle 1997, 191）

ライルによれば、刺激の乏しさからの論証が成り立つのは、普通の幼児が母語に習熟する過程で何が起きているのかを生得論者が忘れているからに他ならない。幼児は孤独な実験室で言語的な刺激を与えられたとしても、普遍文法を習得しな

いかかもしれない。しかし、よちよち歩きの幼児は単に外界の雑音にさらされているわけではない。発話を促され、適切に話した場合には褒められ、不適切に話した場合には矯正されることで言語を教えられるのだ。幼児を多様な雑音の中からどれが文としてみなされるべきかについて仮説を立てる孤独な思索者とみなすというのは、いかにも奇妙な学習モデルである…。

ライルの議論は別の角度から見ることもできる (Blackburn, 28-30)。チョムスキーは、人間には形式的な直観が備わっているという前提を措いている (形式的な直観とは、ある記号列が文であるか否かをその記号列の意味とは独立に判定することを可能にする能力をいう)。この前提は、文とは意味と無関係にその性質を研究すべき対象であるという考えを導く。しかし、言語を習得するという事は、単に構文論の規則を習得することと同じではない。チョムスキーは言葉が意味を持つということが学習に対して果たす役割を軽視している。意味を持つならば文法の習得は容易になる。ブラックバーンはチョムスキーの幼児を、楽譜の模様だけを観察して適切な和声の規則を探し出そうとする人に喩える。これは相当な困難が予想される作業だろう。我々は実際に音楽に親しむことでそうした規則を(やすやすと?) 学ぶのであって、和声の知識を生得的とは考えない。

こうした議論は言語習得に関する行動主義的アプローチを多少とも支持するかもしれない。だが、実際には、チョムスキーの立場は上の議論が強調するほど奇妙だとは簡単に言い切れないのである。というのは、言語の発達に関する我々の直観は殆どあてにならないことが分かっているからである。例えば、幼児の言語行動は両親によって修正されるとライルはあっさり言うが、この描像はかなり怪しいし、そもそもクレオール言語のような現象はライルの議論では説明がつかない。逆に、刺激の乏しさからの論証にしても似たような問題がある。例えば、幼児が言語習得において利用しうると考えられるデータは、通常、親を含めた身近な人々が話す言葉に限られるわけだが、そうしたデータの質や量が厳密にどの程度のものであるかは発達に関する実証的研究による評価を待つほかない¹。

しかし、生得説論争に踏み込むことは本稿の主題ではないので、言語習得についてこれ以上論じることはしない。実際のところ、言語習得の過程がどうであろうと、クワインは行動主義的に特徴づけられる限りでの言葉の意味を問題にしているのだから、ここで生得説を論じるのを打ち切っても問題は生じないだろう。重要なのはむしろ、行動主義的に特徴づけられる意味とは何かという問いである。これに関しては、翻訳をめぐるクワインの議論を参照する必要がある。

3. 根底的翻訳の思考実験

意味の概念と翻訳は密接に結びついている。一般に、正しい翻訳とは意味を保存していることであり、悪い翻訳とは意味を保存しないことだからである。クワインは、翻訳とは意味の物化が頂点に達する局面であるとさえ考えている。なぜか。まず、分析性と同義性は次のように相互に規定される関係にある。

ふたつの表現が同義である

↔ ふたつの表現の双条件ないし等式が分析的である

しかし、翻訳の場面を想定してみると、同義性の概念は単一の言語を超えても適用できるのに対し、異なる言語間で双条件や等式は意味をなさない。クワインにしてみれば、正しい翻訳が存在することを根拠に意味を物化するのは一層たちが悪いということになる（CCE 397）。そうだとすれば、「意味を保存する」といった言い回しとは別の仕方で翻訳の正しさを規定する必要がある。クワインはそこで、言語の翻訳や理解にとってのいわば本当に客観的な要素は何であるかを浮き彫りにするために、根底的翻訳という思考実験を提示するのである。

クワインは、根底的翻訳に携わる言語学者が翻訳の基礎として利用できるデータは、現地人の感覚面に与えられていることが観察される刺激 *stimulation* と、音声その他の観察可能な現地人の振舞いに限られると言う。現実にはこのように極端な条件下で翻訳が行われることはまずありえないし、その理由も容易に理解できる。「親族関係にある言語間、例えば、フリースランド語と英語の翻訳では、語源を同じくする語の形態が類似していることが助けとなる」であろうし、「ハンガリー語と英語のように無関係な言語間の翻訳では、文化の共有に伴って進化しながら伝統的に与えられてきた同値関係がその助けとなるかもしれない」（WO 28）。また、これまで全く接触のなかった社会で用いられる言語を翻訳する場合でさえも、その社会の周辺に住む人々によって、通訳の連鎖が作れるかもしれない。しかし、非現実的であることは重要ではない。言語学においては行動主義以外の選択肢はありえないが故に、根底的翻訳における作業過程こそが翻訳や言語理解における本質的な部分を構成すると考えなければならないとされるのである。

加えて言えば、クワインによると根底的翻訳を二ヶ国語間に限定する必要すらない（OR 46）。根底的翻訳を行う言語学者とこれから母語を習得する幼児は類比的であり、このことは根底的翻訳が原理的には自国語の中でも生じうることを示

している。「自国語を自国語へと翻訳する」と言うと奇妙な表現だが、それを奇妙だと思うのは、我々が同音翻訳 *homophonic translation* に馴れすぎているからである。一般に、母語の習得は年長者の発話を模倣するという過程を含むのだから、これは悪いことではない。だが、自国語による会話であっても、相手の発話が字義通りにとると何を言っているのか分からないときに、解釈を変えることで整合性を取り戻すという場面はある。これを一種の翻訳とみるのは不可能ではない。それ故、異国語と自国語の違いは程度問題として扱われることになる。

以上を踏まえて、根底的翻訳がどのように進むと考えられるのかをみてみよう。根底的翻訳を行うフィールド言語学者はともかくも現地人の言語行動と思しきものを観察しなければならない。クワインによれば、未知の言語への入口となるのは、その発話が特定の場面（刺激）と結びついているような文、すなわち観察文 *observation sentence* である。例えば、現地人は狩りの場面において、我々が「兎」と呼ぶものに出くわすと‘Gavagai’と言う。言語学者は、この文は「兎だ」を意味するのではないかと推測する。そして、この推測が正しいかどうかを確かめるため、実際に様々な状況の中でその現地語の文を使ってみる。兎が見えるところで‘Gavagai’と言い、それに対して現地人の同意が得られ、また、兎のいない場所でも同じように発話し、それに対しては不同意が認められたならば、推測の信憑性は高くなる、といった具合である。言語学者は差し当たりこのようにして観察文の翻訳を進めることができる。

しかし、観察文以外の文に関する翻訳を進めるためには、文を構成する様々な要素、すなわち文の内部構造にまで立ち入った分析を行わなければならない。クワインによれば、指示の不可測性が入り込むのはこの段階においてである。例えば、前段落では‘Gavagai’を「兎だ」と訳するのが適切だとした。だが、仮にこの発話を文‘Gavagai’ではなく単語‘gavagai’として認定するならば、これが我々のいう「兎」の外延と等しいとは必ずしも言えない。というのも

この名辞が適用されるのは兎などであって、単なる兎段階、あるいは、兎の短時間の断片ではないと誰が言えよう。どのみち、‘Gavagai’への同意を促す刺激は、「兎だ」への同意を促す刺激と同一であろう。あるいは、‘gavagai’が適用される対象は、兎のすべての雑多な分離されていない部分であるかもしれない。(WO 51f)

ここで重要なのは、単語‘gavagai’がどのように解釈されようとも、観察文‘Gavagai’

の翻訳は確定するとクワインは考えている、ということである²。表面的には、文の構成要素の指示が定まっていなくても関わらず、翻訳が確定しているというのはかなり奇妙に思われる。しかし、こうした状況は同義性の観念は不明瞭であるという論点に由来している。

表現の意味や同義性と一口に言っても、情動的な感覚や詩的な感覚なども含めて多くの側面があるだろう。こうした複雑さを避けて現地語の表現と日本語の表現の同義性を取り出そうとするならば、クワインは我々が日常的に用いる同義性とは別に人工的な道具立てを用意する必要がある。では、根底的翻訳に要求される意味とはどのようなものだろうか。明らかにそこでは、心理的な感覚などではなく、言語外の対象ないし世界と関わりを持つという意味の側面が重要になる。例えば、‘Gavagai’の翻訳は様々な状況における現地人の同意/不同意に基づいてなされた。言語学者はまず現地人にとっての同意/不同意を表す記号を発見し、しかる後、様々な状況において自分で現地語の文を発話し、その文の真偽を告げるように現地人を促し、彼女が答える際の刺激条件に注目する。刺激条件は明瞭な物理的語彙によって記述されるので、クワインは文の刺激意味 *stimulus meaning* を、その文の肯定を促す刺激の集合と、否定を促す集合の順序対として定義する。すなわち、翻訳図式の適切さに関してクワインが課す制約は、基本的には現地語の文の刺激意味と日本語の文の刺激意味の同値（認知的同値性 *cognitive equivalence*）に限られるのである³。それ故、文の水準では同値性を保ちながら、語の水準では指示対象が定まらないということが原理的に許容される。「[観察文と] 刺激意味は普遍的に通用する通貨であり、名辞と指示対象は我々の概念図式に特有なものである」(WO 53)。

兎を直示しようとしても、それは同時に、兎の分離されていない部分でもあるし、あるいは「兎性」という普遍の例化であるかもしれない、といった仕方で複数の「指示の枠組」が得られるという可能性は、いかにしても排除できないとクワインは考えている。それどころか、これと似た状況は身近なところにも見出せるとも言われる。例えば「 α 」を指差して「アルファ」と言っても、その指示対象はギリシャ文字アルファのタイプともトークンとも解釈できる、といった場合である。実際、語「アルファ」は一般名として用いられるだけでなく、抽象名詞としても用いられるので（例えば、「アルファは文字だ」）、単なる直示ではこのような多義性を区別できない (OR 38)。

このような多義性は、個々の発話とその刺激意味のみを孤立させて扱うから生じるのだと思われるかもしれない。というのも、発話の中に現れる語句は他の発

話の中にも現れるということを考慮するならば、翻訳のあり方はかなり制限されるだろうからである。こうした作業は、現地語の表現中から個別化に関わる文法的な基準、クワインの表現では「対象化を行うような装置の全体 (冠詞、代名詞、さらに同一性、複数性、述定、あるいは正準的記法における量化、といった語法)」(WO 236) を見つけ出す作業として特徴づけられる。例えば、ある表現‘F’が

- ・ 三つの F がある
- ・ あの F は昨日我々が見た F と同じである
- ・ 唯一の F がここにある

といった文脈で現れるとすれば、これを物質名詞や抽象名詞と解することはできない。こうしたやり方で翻訳を進めていけば、初期の誤りは後にあぶりだされると期待される。クロスワードパズルが最終的には唯一の解答を許容するように、翻訳も最終的には唯一に定まるのではないか (cf. Blackburn 1984, 285)。

だが、こういった反論ではクワインの議論を突き崩すことはできない。例えば、兎の耳と足を指差しながら、「これとこれは同じ‘gavagai’であるか」と尋ねて同意が得られたとしよう。しかし、この観察データが「兎の分離されていない部分」という解釈を排除しうるのは、「同じ」という語の翻訳が議論の余地なく確定している場合であって、厳密には、「共にある」などと翻訳される可能性を考慮せねばならない (OR 33)。つまり、翻訳図式に対して体系的な調整を行うならば、「兎」以外の訳語を割り当てることは不可能ではない、ということである⁴。

[表現上の] 装置全体は相互依存的であり、名辞という概念は、関連する装置と同様、我々の文化に特有である。現地人は非常に異なった言語構造を通じて実質的に同じ効果を挙げるかもしれないので、我々の装置を現地語でたまたまうまく解釈したり、あるいはその逆をすると、そうした解釈は不自然で大幅に恣意的なものであることがわかるかもしれない。(WO 53)

また、根底的翻訳が原理的には自国語の中にも生じうるという先ほどの論点もいまや理解できる。つまりは、自国語に関しても指示の不可測性は生じることである。例えば、我々が日常的にコミットする対象領域を定義域とし、そうした対象のシングルトン (要素をひとつしか持たない集合) のみを含む対象領域を値域とする一対一対応の関数 f を考えよう⁵。そうすると、我々は見かけ上 x に

ついて何事かを述べている文を、 $f(x)$ について述べている文として再解釈することができる。その際、述語に関しても再解釈を施せば文の真理条件は完全に保存される。

以上により指示の不可測性が証明された、というのがクワインの議論の大筋である。勿論、クワインは現場のフィールド言語学者が倒錯した翻訳図式を採用する可能性を憂慮しているわけではない。言語学者は‘gavagai’をとにかく「兎」と翻訳しておき、引き続き個体化に関わる語彙の解明に乗り出すに違いない。むしろクワインは、プラグマティックな考慮は翻訳の概念にとって本質的・構成的ではないと言いたいのである。

「兎」の選択を導いている暗黙の格率は、「持続的で相対的に一様な対象は、短めの表現に対応する」というものだ。このことが意識されれば、言語学者はこの格率を言語的普遍、つまりあらゆる言語がもつ特徴のひとつとして称え、その心理学的な蓋然性を容易に指摘するかもしれない。しかし彼は間違っている。この格率は客観的に不確定な事柄を固定するためのペテンに過ぎない。もちろんそれは非難されることではない。しかし私は哲学的な主張をしているのだ。(OR 34; cf. WO 40)

しかし、現場の言語学者が用いるであろうこうした格率が「客観的に不確定な事柄を固定するためのペテン」だというのは、常識的にはかなり過激な主張に映る。クワインの言語観は、翻訳や言語理解のための証拠は行動だけからなるという前提から出発していた。しかし、フックウェイも述べるように、この明白な真理は議論の過程で「翻訳図式は行動に合致している限り正しい」というかなり疑わしい主張へと密かに移行したようにすら見える (Hookway, 159)。ここには不整合がないのだろうか。

この点を考えるために、パトナムが作った例を取り上げよう。これは翻訳の不確定性に対する疑問として提示され、また細かいところで同意できない部分もあるのだが、この例は我々の関心に近いところにある。いま、ふたつの日本語から日本語への翻訳図式があるとす。ひとつは単なる同音翻訳である。もうひとつは少し込み入っていて、ふたつの定常文 *standing sentence* (一旦同意されたならば、その後は刺激を与えられなくとも同意が引き出せるような文)、例えば、「地球から太陽への距離は1億5,000万 km である」と「火星には川がない」を置換する他は同音翻訳となるような翻訳図式を考える。パトナムは、これらの翻訳図式は

ともにクワインが『ことばと対象』15節で提示している条件（翻訳図式が適切であるための条件）を満たしていると主張する。そして、仮にそうだとすれば、次のような状況が想像できると言う。ある話者が

地球から太陽への距離は1億5,000万kmである

光の秒速は30万kmである

∴ 太陽から地球に光が届くのに約8分かかる

と推論したとしよう。ところが、この発話に対して二番目の翻訳図式を適用するならば、我々は話者に対して極めて不自然な心理学を帰属させなければならないであろう、と (Putnam (1975), 168f)。

前半の議論には問題があると思われる。一見すると、クワインの「刺激意味」は定常文を個別化するのに必要なだけの材料を提供するとは到底思えないので、指示の不可測性や翻訳の不確定性が生じるのは自明で全く意外性がないと思われる。しかし、ここで言語的的刺激と非言語的刺激的の区別を破棄して、言語的反應を引き出す刺激は非言語的刺激には限られないと考えるならば、我々はもう少しクワインの議論を好意的に見ることが出来る。言語的刺激として「最も明白なケースは質問することである」(WO 10)。例えば、「参政権は基本的人権である」と「言論の自由は基本的人権である」のふたつの文は、通常は刺激の有無に関わらず常に同意される定常文に分類される。そのため、これらの文は同一の刺激意味をもつと結論したくなる。しかし、「なぜ出版物の検閲は禁じられるのか？」といった言語的刺激が与えられる条件下では、後者の肯定のみを促すことができるだろう (鈴木, 109)。もしもこうした手順が認められるなら、同じ要領で「地球から太陽への距離は1億5,000万kmである」と「火星には川がない」とを区別できないと考える理由はない。そういうわけで、パトナムが提示している二番目の翻訳図式が刺激意味を保存しているとは言えないと思う。

しかし、彼の議論の後半が示す論点は重要である。フックウェイも同じようにして、兎に関する奇妙な信念を現地人に帰属させるという例を提示している。例えば、いま‘gavagai’が分離されていない兎部分を指示していると仮定しよう。現地人が特に兎を指示するための名辞を持っていないというのは、たしかにありうるかもしれない。しかし、そういう事態を理解するためには、現地人に対して不自然な心理学を帰属させることを伴う。「例えば、彼らは兎に対して知覚的に敏感でなく、分離されていない兎の諸部分に対して知覚的に敏感である。彼らは

分離されていない兎の諸部分のパイが食べたいので、分離されていない兎の諸部分を買うために市場へ行く、などなど」(Hookway, 158)。

そうだとすれば、「翻訳図式は行動に合致している限り正しい」という主張に突きつけるべき疑問はこうである。翻訳図式を作るにあたって我々が考慮する項目には、言語行動の傾向性だけでなく、話者の言語行動に対して満足いく心理学的説明を与えることも含まれるということ、そして、もし前者のみが本当の意味で客観的な証拠なのだと主張するならば、それはごく普通の意味での「翻訳」という概念を不当に歪めるものではないか、と (Putnam (1975), 171)。これは要するに、心理学的な仮説は翻訳の正しさに関与する証拠 (事の真相 fact of the matter) として認めるべきかどうか、という問いだと言えよう。クワインが支持する物理主義は心理学のような基礎的でない学科が説明に関する自律性をもつことに対して否定的である。他方、フックウェイなどの解釈者たちは、以上の議論がクワインの行動主義に対する的を射た反論になっていると考えているように思われる。ここで議論は平行線を辿ってしまう⁶。

こうした状況が、クワインの不確定性テーゼをめぐる一般的な認識ではないかと思われる。それに対して本稿は、こうした対立において行動主義を退けて志向的実在論の側に肩入れする人々であっても、クワインの議論からひとつの教訓を読み取ることは可能ではないかという点を付け加えたいのである。実際、心理学にばかり焦点をあてることには、クワインの議論のポイントを見失わせるものがあるように思う。というのは、基礎的な物理科学と基礎的でない科学の区別、といった危うい話題に立ち入ることなしに、先に提示された疑問を回避するような、不確定性の例を提示することはできないのではないかと我々は考えるからである。そうした例を挙げるためには、そもそも翻訳の正しさに関する事の真相はないというクワインの主張を別の角度から考えておく必要がある。

4. 理論間の翻訳

不確定性テーゼを論じる文脈でよく出される例である順序対の集合論的定義、すなわち、「 $\langle x, y \rangle = \{\{x\}, \{x, y\}\}$ 」を見てみよう。この定義の重要な点は、厳密な同義性は要求されていないということ、つまり、順序対 $\langle x, y \rangle$ とは何であるかについて、唯一正しい言い方があるわけではないということだった。この定義をふたつの理論間の「翻訳」とみなすならば、関係の理論の対象は何かという問いは、集合論への翻訳の仕方に依存する。つまり、ある理論がどのような対象の存在に

コミットしているのかは、それを他の理論へと翻訳する仕方に相対的だと言うことができる。ハーマンによれば

クワインの根底的翻訳の不確定性が主張しているのは、様々の同程度に良い選択肢でありながら同値でない一般的な翻訳図式が常に存在するという点で、自然言語を別の自然言語へと翻訳することは自然数論を集合論へと翻訳することに似ているということだ。人は何らかの想像的で一般的な翻訳図式と相対的にのみ、単一の文の「正しい」翻訳について語りうる。(Harman, 14f)

順序対の定義がクワインの不確定性テーゼの範例であるという考えは、仮に正しいとしても全く意外でなく、人を失望させるかもしれない。だが、こうした印象は本当に適切だろうか。たしかに「 $\langle x, y \rangle = \{\{x\}, \{x, y\}\}$ 」という式は日常的な意味で翻訳とは言えない。だが、そう言うための主要な根拠が、「この等式では意味が保存されていない」といったことにあるのだとすれば、これは「正しい翻訳とは意味を保存することだ」という、問題含みの前提に基づいているように思われる。そうした前提を採用しないとすれば、順序対などの消去的定義を不確定性テーゼの範例とすることは、意外性は少ないかもしれないが、我々に一定の見通しを与えてくれる。

例えば、後に誤っていることが分かった理論の存在論的コミットメントについて考えてみよう。H.フィールドは、科学革命を考察することで、科学に現れる多くの理論語は指示に関して不確定 *referentially indeterminate* であることが示されると主張する。すなわち、過去の科学者たちの用いた様々な名辞について、その指示対象が何であるかを「我々は知るできない」と言うだけでは充分でない。我々の無知が問題なのではなく、そもそも何を指示していたのかに関する事実は存在しないということを示す一例を積極的に示せると言うのである (Field)。彼は一例として「質量」の概念を挙げている。その概略を以下に示そう⁷。

ニュートン力学に現れる「質量」という語を含む文の多くが (e.g. 「質量は、運動エネルギーを2倍したものを速度の2乗で割った値に等しい」)、特殊相対論の登場によって放棄されることになった。勿論、このことだけではニュートンの用いた「質量」という概念が今日のそれとは全く別物だったということにはならない (指示対象が何であるかを正しく理解していながら、それについて誤った信念を持つということは日常的には十分にありうる事態である)。物理法則は低速という条件下ではニュートン力学で実質的に近似できるからである。科学哲学におい

てしばしば指摘されるように、古い科学は我々が日常的に犯すような「細部」の誤り、例えば「太陽は地球から1億5,000万kmも離れてはおらず実は5,000万kmしか離れていなかった」といった種類の誤りを犯したわけではない。古い科学の誤りはずっと根本的なところ（絶対時間などの観念）にあったとされる。

さて、フィールドが注目するのは、現代物理においてはじめて現れた質量概念の二義性、すなわち粒子の固有質量 *proper mass* と相対論的質量 *relativistic mass* の区別である。この区別を踏まえることで、我々は

N1: ニュートンのいう「質量」は相対論的質量を表示する

N2: ニュートンのいう「質量」は固有質量を表示する

というふたつの仮説を立てることができる。これらは両立不可能であるが、その一方でニュートン力学が近似的には充分正確であることから、両者の否定連言 ($\neg N1 \ \& \ \neg N2$) もまた成り立たないことが分かる。すると、我々にはN1とN2の二者択一しか残されていないことになるが、ニュートンが本当の意味で用いていた「質量」概念はどちらなのかと問うのはナンセンスである。いかなる心理学的な考察を加えようと無駄であり、ここに現れた不確定性を解消することはない。

以上がフィールドの議論の大筋である。思うに、この議論のポイントは、誤っていることが明らかになった理論に対して翻訳を試みている、というところにあると言えよう。デュエムのテーゼによれば、理論は全体として経験の裁きを受けるため、理論が反証される場合には改訂の仕方は一通りではない。もちろん、改訂の際に理論に含まれる全ての文が同じように改訂の対象となるわけではなく、理論体系が全体として単純になるように考慮すべきであるのは間違いないが、そうした考慮を加えたとしてもなお、改訂のあり方が一通りでないということは、充分ありそうなことである。この場合、指示に関する不確定性が生じるのは、以上の例が示すように避けられないかもしれない。

とはいえ、この例は同時に、指示の不可測性は実際にはあまり大した問題は引き起こさないのではないか、という印象も与えてくれる。現在の理論を用いて過去の誤った理論を解釈する際に、現在の理論によって措定される対象が過去の理論の中には明瞭に見出せないとしても驚くに値しない。繰り返しになるが、上の例は過去の理論における存在論的コミットメントが現在の理論の存在論的コミットメントと全く異なるとか、置換 *displace* された理論に現れる理論語はすべて指示対象を欠く、などといった極論を述べているわけではない。また、この例は、

行動主義それ自体の当否に関して比較的中立な具体例でもあるが故に、指示の不可測性テーゼをはじめから不合理含みのものとして退けることはできないということも示している。以上のことから、本稿の冒頭で示唆したように、クワインの指示の不可測性テーゼは理解可能なものであり、なおかつ、一定程度擁護することが可能である、と結論する。

* 本稿は科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

¹ 生得説の歴史やチョムスキーの議論については (Cowie 1999) が参考になる。

² つまり、これは翻訳の不確定性の具体例ではない。(cf. PT 50)

³ ここで、刺激意味と日常的な意味の違いとしてふたつの点を述べておく。(i) 文の意味は話者によって意識されるのに対し、神経生理学の素人である話者は刺激について考えることができないため、刺激意味を意識することができない。(ii) 文は非言語的な対象や事態そのものではなく、経験が生起したと言われる際の刺激状況に対応づけられるので、話者がある文の刺激意味に属する神経刺激のパターンを実際に経験しているにも関わらず、その文は真でないということがありうる。例えば、本物そっくりのアヒルの模型を見せられた話者は、文「アヒルだ」に同意するかもしれないが、それは真ではない (Putnam (1983), 241)。ただし、このことは外界について語る手段を奪うわけではない。文が全体として何らかの刺激と対応するということと、文が外界の何かについて何事かを述べる、というものは別のことである。

⁴ フックウェイは、クワインの議論を額面通りに受け止めるならば、この「体系的な調整」はどれほどアドホックなものでも許される、と述べる (Hookway)。

⁵ このような一対一対応の写像は「代理関数 proxy function」と呼ばれる (OR 57)。

⁶ (Blackburn (1984), 277–281) は homely な解釈者と bleak な解釈者という対比で論じている。

⁷ 古い理論の内容について表現する際に生じる不確定性については、(Blackburn, 148–151) も参照せよ。ブラックバーンは同種の不確定性がいたる領域で見出せるという。例えば、道德に関わる例として、以下のようなパズルがある。“Kraut”をドイツ人に対する蔑称だとする。いま、ある人物がドイツ人フ란ツに対して「奴は Kraut だ」というのを耳にしたあなたは彼の発言に抗議するとしよう。しかし、その人は偽な発言をしたのか、それとも字義通りには真だが不快な態度を表出したと分析すべきなのか。事の真相はないと思われる。

[参考文献]

- Blackburn, Simon. *Spreading the Word*. Oxford University Press, 1984.
 Cowie, Fiona. *What's within?* Oxford University Press, 1999.
 Field, Hartry. “Theory change and the indeterminacy of reference.” *Journal of Philosophy* 70, 1973: 462–481.
 Føllesdal, Dagfinn. Quine, Douglas, B. ed. *Confession of a Confirmed Extensionalist and Other Essays*, Harvard University Press, 2008. (CCE)
 Harman, Gilbert. “An introduction to ‘Translation and meaning,’ Chapter two of Word and Object.” in Davidson Donald. Hintikka Jikko. ed. *Word and Objections*. Reidel, 1969: 14–26.
 Hookway, Christopher. *Quine: Language, Experience and Reality*. Polity Press, 1988.
 Hylton, Peter. *Quine*. Routledge, 2007.
 Putnam, Hilary. *Mind, Language and Reality*. Cambridge University Press, 1975.
 —. *Realism and Reason*. Cambridge University Press, 1983.
 Quine, Willard. v. O. *Word and Object*. MIT Press, 1960. (WO)
 —. *Ontological Relativity and Other Essays*. Columbia University Press, 1969. (OR)
 —. *Pursuit of Truth*. Harvard University Press, 1992. (PT)
 Ryle, Gilbert. 「バベルのモウグリ」『思考について』所収、みすず書房、1997、180–195。
 鈴木貴之「翻訳の不確定性と意味の懐疑論」、『哲学・科学史論叢』、2000、105–128。